

サウディ・アラビアの考古学的調査（JICA Project）報告

川床睦夫

Report of the JICA Project of the Archaeological Survey in Saudi Arabia

Mutsuo KAWATOKO

JICAによる「サウディ・アラビア遺跡発掘調査計画」は、2年目の準備段階を終了した。サウディ・アラビアが外国人に門戸を開くことを決定した後、2001年1月、2002年1月～3月、2002年9月、2003年1月～2月に訪問、調査および諸交渉を実施した。この結果、発掘調査に関する諸技術を移転しつつ、イスラーム時代の遺跡発掘調査、プレ・イスラーム時代の遺跡発掘調査、諸言語による岩壁碑文調査を実施することが、JICAとサウディ・アラビア教育省考古博物館庁との間で基本的合意（日本西アジア考古学会など3学会の小委員会等からなるサウディ・アラビア研究会が調査研究を担当する）に達した。一期3年間、3～4期を計画している。

2003年12月から、紅海沿岸に位置するプレ・イスラーム時代から初期イスラーム時代に栄えた港市ジャール遺跡の発掘調査、ジャール al-Jār～ヤンブウ Yanbu' 地域から聖都マディーナ al-Madīna にいたる諸ルート上の岩壁碑文調査およびナジュラーン Najrān 地方ビィル・ヒマー Bi'r Himā～ヤダマ Yadama 地域の岩壁碑文調査を実施する。すでに、ジャール遺跡の予備調査、碑文調査の一部を実施し、多大な成果を挙げているので、今後の成果が大いに期待できる。なお、プレ・イスラーム時代の遺跡については調査地選定の段階にある。

キーワード：サウディ・アラビア、ジャール、岩壁碑文、港市、JICA、ナジュラーン

The Japan International Cooperation Agency (JICA) Project "Japanese Technical Cooperation for Archaeological Survey and Excavation Planning" has finished its second year of preparations. Just after the Kingdom of Saudi Arabia decided to accept foreign archaeologists to survey in the kingdom, we visited there for the surveys and negotiations in January, 2001, from January to March, 2002, September, 2002, and from January to February, 2003. Consequently, JICA and the Deputy Ministry of Antiquities and Museums agreed to the following surveys.

1. Excavations in the Islamic site.
2. Excavations in the pre-Islamic site.
3. Survey and study of the rock inscriptions in various languages.

The term of this project is three years and we are planning to continue it for three or four terms. This project has two purposes: One is to apply Japanese archaeological techniques to the surveys, and the other is to establish and develop the study of Saudi Arabian archaeology in Japan. So, we formed a Saudi Arabia study group based on three academic associations named here: the Japanese Society for West Asian Archaeology, the Japan Association for Nilo-Ethiopian Studies, and the Japanese Society for Arid Land Studies.

Now, we are planning to promote full-scale excavations from December, 2003 in the al-Jār site, a port city on the Red Sea coast of the pre-Islamic and Islamic periods. Also, we started an exhaustive survey and registration of the rock inscriptions in the al-Madīna / al-Jār / Yanbu' area in Hijaz and the Bi'r Himā / Yadama area in Najrān. We have already conducted preliminary surveys in the al-Jār site and partial surveys and registration of the rock inscriptions in these two areas. We feel certain that further excavations and surveys will produce a great contribution to the world of Saudi Arabian archaeology.

Key-words: Saudi Arabia, al-Jār, rock inscription, port city, JICA, Najrān

調査に至る経緯

JICAによる「サウディ・アラビア遺跡発掘調査計画」は、2年目の準備段階を終了した。この間、2001年1月、2002年1月～3月、2002年9月、2003年1月～2月に訪問、調査¹⁾および諸交渉を実施した。この結果、発掘調査に関わる諸技術を移転しつつ、イスラーム時代の遺跡発掘調査、プレ・イスラーム時代の遺跡発掘調査、諸言語による岩壁碑文調査を実施することが、JICAとサウディ・アラビア教育省考古・博物館庁との間で基本的合意に達した。一期3年間、3～4期を計画している(図1)。

2002年9月の正式交渉では、紅海沿岸に位置する初期イスラーム時代に栄えた港市ジャール遺跡の発掘調査、ジャール al-Jār～ヤンブウ Yanbu' 地域から聖都マディーナ al-Madīna にいたる諸ルート上の岩壁碑文調査およびナジュラーン Najrān 地方ビィル・ヒマー Bi'r Ḥimā～ヤダマ Yadama 地域の岩壁碑文調査が決定し(図2)、プレ・イスラーム時代の遺跡についてはワジュフ al-Wajh あるいはサージュ Thāj を対象にするか否かを検討中である。



図1 サウディ・アラビア全図



図2 調査地の位置関係

ジャール遺跡

ジャールはアラビア半島の北西部ヒジャーズ Hijāz 地方の港市で、プレ・イスラーム時代からイスラーム時代中期まで使われた遺跡である。聖都マディーナがヤスリブ Yathrib と呼ばれていたジャーヒリーヤ Jāhilīya 時代(プレ・イスラーム時代)にも機能していた港で、イスラーム時代に入ると、穀倉地エジプトから小麦などの物品をイスラーム共同体の首都マディーナに運ぶための港となり、北紅海の主要港として大いに繁栄した。

ジャールはマディーナの浜²⁾で、マディーナまで3日行程³⁾である。ジャールはジュッダ Judda よりは小さい⁴⁾が、北紅海の主要港で、中国 al-Śīn、インド al-Hind、湾岸、オマーン 'Umān、アデン 'Adn、ジュッダ、トゥール al-Tūr の浜、aira Ayla(現在のアカバ)、ラーヤ Rāya の浜(シナイ半島南西部)、そしてクルズム Qulzum(現在のスエズ)を結ぶ港である。10世紀のイブン・ハウカル Ibn Hawqalによれば(図3)、紅海沿岸には、ジュッダから北へ、ジャール、タバー Tabā⁵⁾、アイヌーナ Aynūna、aira、ラーヤ、クルズムといった港が続いている⁶⁾。アデンからジュッダが1ヶ月、ジュッダからジュフア al-Juhfa が5日、ジュフアからジャールが3日、ジャールからaira が20日行程である⁷⁾。

また、プトレマイオスの『地理誌』に記載されるイアムビア村 *Iαμβία κώμη* (第VI卷第7章第3節、現在のヤンブウ)の南にあるコパル村 *Kοπαρ κώμη*⁸⁾ (第VI卷第7章第5節)がジャールであろうと考えられる(織田 1986: 103, 図版XXI)。

イスラーム時代に入ると、預言者ムハンマドが派遣したエチオピア al-Habasha⁹⁾への移民団が2隻の船でジャールに戻って、マディーナに向かった¹⁰⁾。その後、カリフ、ウマル 'Umar bin al-Khaṭṭāb はエジプトの征服者であり、総督であるアムル 'Amr bin al-'Āṣ にエジプトの穀物をマ

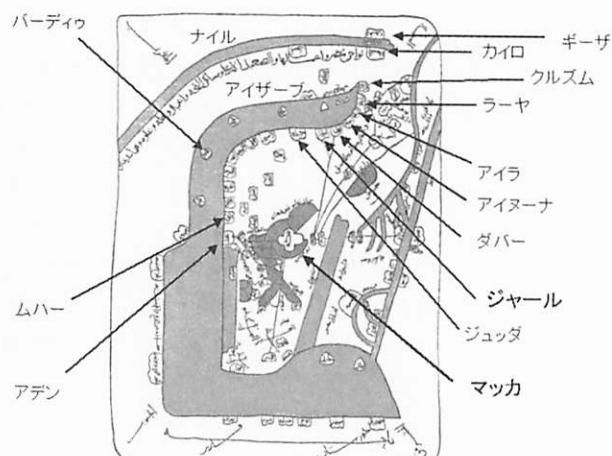


図3 10世紀の地図

ディーナに送るよう命じた。アムルは3000 イルドップ前後の穀物を積んだ船20隻をクルズム経由でジャールに運んだ。ウマルはジャールに赴き、2つの城を建設し、穀物をその中に保管した¹¹⁾。

こうして、ジャールはエジプトの小麦などを蓄える「マディーナの穀物倉庫」¹²⁾となった。9世紀のスラミー Sulamīによれば¹³⁾、「ジャールは海辺にあり、エチオピア al-Habasha とエジプト Miṣr の地、そしてパフラインと中国から船が来る。そこには説法台 minbar [が設置されたモスク] がある。ジャールは住民が多い村 qarya で、海に注ぐワーディー・ヤルヤル Wādī Yalyal の水を飲む。ジャールには多数の城 quṣūr がある。ジャールは2つに分かれている、半分は1マイル¹⁴⁾離れた海中の島にあり、陸地のジャールに面している。カラーフ Qarāf と呼ばれる島はエチオピアの船専用である。島の住民はジャールと同様に商人である」というほどに繁栄した。10世紀のムカッダスイー al-Muqaddasīによれば、ジャールは海岸にあり、3つの壁に囲まれ、海に向かって開いている。建物は高く聳え、スク（市場）は繁栄している。ジャールはマディーナの穀物倉庫で、水はバドゥルから、食料はエジプトから運んだ¹⁵⁾。ますますの繁栄の様子が窺える。

しかし、10世紀には度々、遊牧民の襲撃があり、11世紀にナースィル・フスロー Nāṣir-i Khusrāu が訪れたときは、小さな村になっていた(Scheffer (tr.) 1881: 123)。そして、12世紀頃、ジャールは衰退し、13世紀初頭にはヤンブウにその地位をとて代られることとなる (Ministry of Communication 1999: 42; Ghabbān 1993: 18-22)。

この後、19世紀頃にはJ. W. ブルクハルト (Burckhardt 1829: 408) など多数のヨーロッパ人旅行家たちがジャールの地に位置するプライカ al-Burayka に寄港した。しかし、

この港の位置はわからない。

ジャール遺跡はサウディ・アラビア王国西部遺跡区¹⁶⁾に位置する(図4)。マディーナの南西約140km、バドゥル Badr の西南西約30km、ヤンブウの南東約80km、ラーリス al-Rāyis の北西約10km にあるプライカ入江の東奥にある。入江にはバドゥル方面からワーディー・マファイッタ Wādī Mafaytta が流れ込んでいる(図5)。

この遺跡の存在は古くから知られ、スイスのジャーナリストのヘレン・カイザー Helen Kaiser が情報省の監督下に1964年3月3日に同遺跡を訪問した。その時同行したウヤイディー Ahmad al-'Uyaydī が示す写真によれば、一部が盗掘され埋もれていたズィール zīr (水甕) が露になっている (Hamad al-Jāsir 1981: 167-172)。また、アブド・アルクッドウース 'Abd al-Quddūs al-Anṣārī は、1971年4月と5月に同遺跡を訪問し、想像復元図を含む旅行記録 ('Abd al-Quddūs al-Anṣārī 1971: 449-494) を刊行した。

考古学的調査は考古・博物館局によって1980年7月に実施された。試掘を含む分布調査 (Killick, et al. 1981: 51-53, pls. 46, 51, 57, 58, 63, 64, in Arabic 46-47) の結果、ジャールは遺跡として認定され、フェンスで囲まれた(遺跡番号 210-315)。5角形のフェンス¹⁷⁾は遺跡を完全に囲っているわけではないが、重要な遺構はフェンス内にある(写真1)。

この調査によって、ムカッダスイーの記事にあるコの字型の城壁が残っていること(写真2)、建造物はサンゴ・ブロック造りが主体であること(写真3)、日乾レンガ造りの部屋があること、城壁内外に多数のマウンド(写真4)があり、遺構が含まれている可能性が高いこと、水中にも遺構があること、城壁の北東方向 240 m のところに貯水槽があること、土器とガラス器はイスラーム時代からオスマン朝支配時代のものであること、350~353年のローマ・コインは発見されたが、ローマ時代の土器は欠如していることなどがわかった。

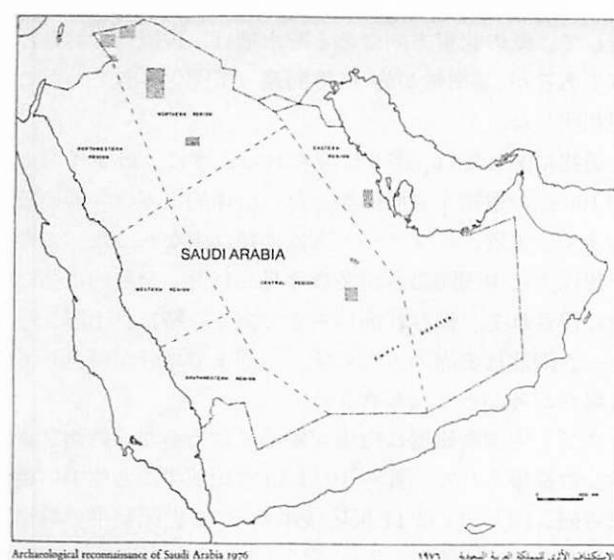


図4 サウディ・アラビア考古・博物館庁の遺跡区分

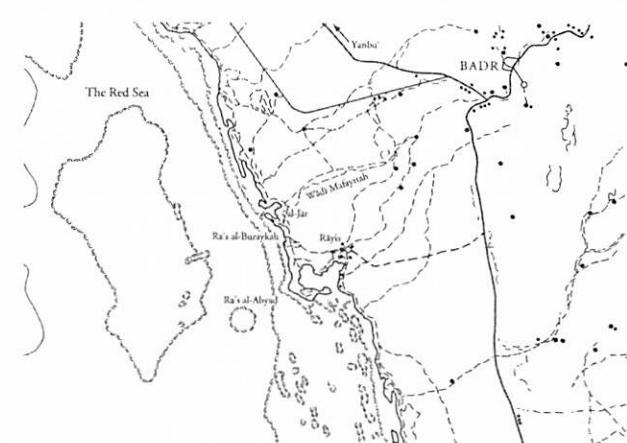


図5 ジャールとプライカ周辺図



写真1 ジャール遺跡
(フェンスに囲まれた遺跡指定区は広大である)



写真2 コの字状遺構



写真3 サンゴ・ブロック



写真4 城壁内外のマウンド

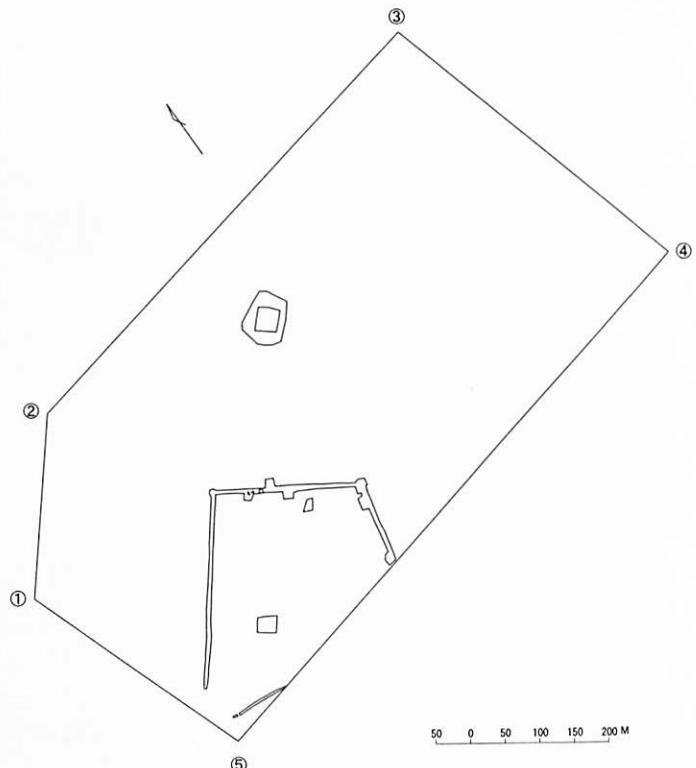


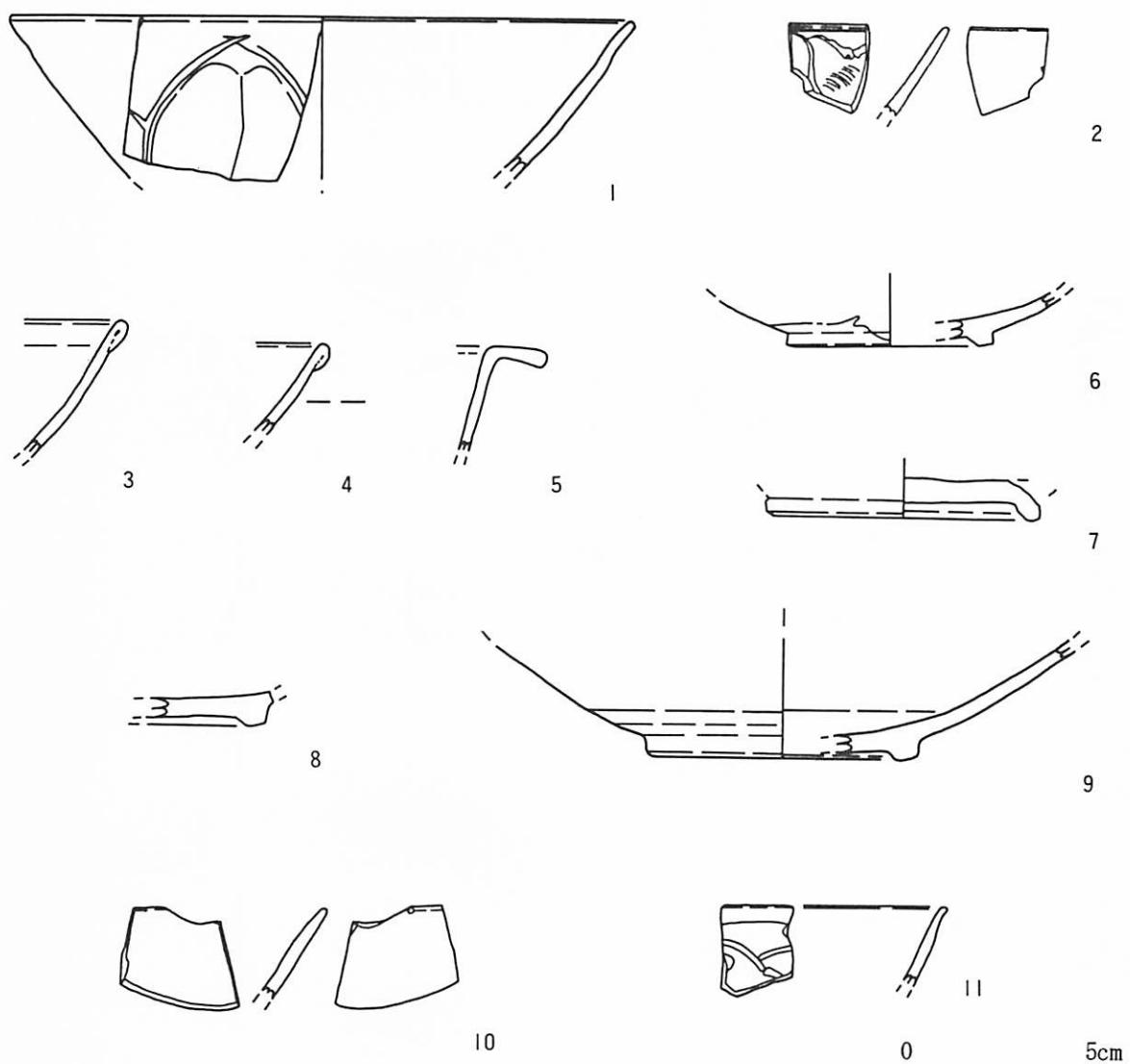
図6 簡易測量図

われわれは、2001年1月にジャール遺跡を訪問し、2002年1月に地上から遺構確認と遺物観察を行った。そして、2003年1月に遺構の簡易測量、表面採集、周辺地域の遺跡調査を実施した（図6）。

遺構に関しては、1980年の調査によって明らかになった遺構の再確認を行った。その結果、コの字状の壁はおおむね正確に図化されていた。北西壁は約282m、北東壁は約215mで、中央付近に13×7.2mの突出部があり、南東壁は約116mであった。壁の厚さは約1.6mである。これに対して、壁の北東方向にある貯水槽は、規模はおおむね正確であるが、基準軸が約90度間違って図化されていたことが判明した。

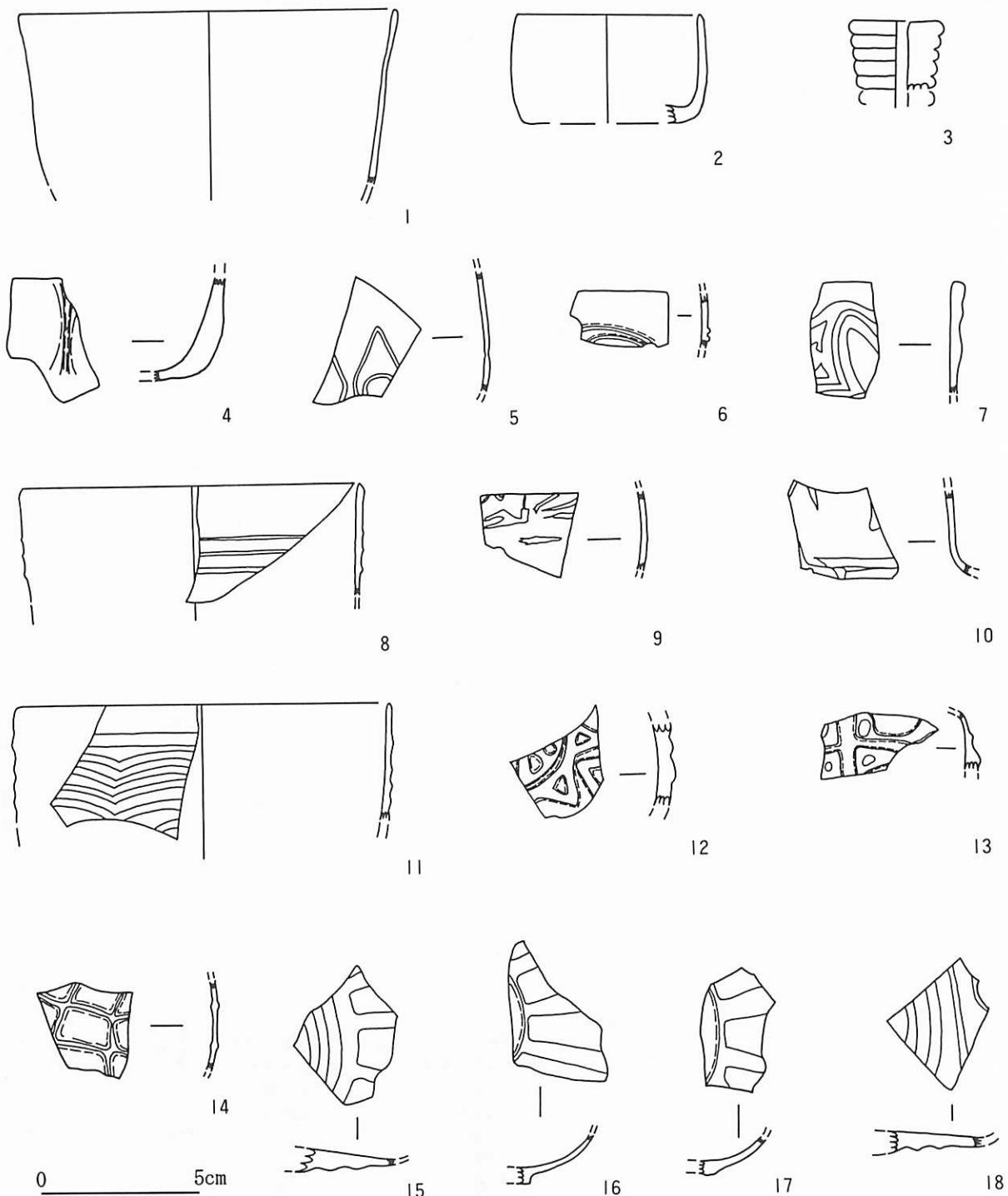
遺物に関しては、図9に見られるように、36ポイントで約100点の遺物を表面採集した。全体的にガラス器の破片が多く、土器、イスラーム陶器の類は少なかった。また、予想以上に中国陶磁器が多数発見された。全般的に強い塩分に侵されて、保存状態は劣悪である。特に、土器、イスラーム陶器は表面のみならず、内部まで塩分が侵食している場合が多かった（写真5）。

さて、中国陶磁器は白磁が中心ではあるが、越州窯青磁が少數採集された。図7-10は10世紀前半から中頃の越州窯青磁、図7-11は11世紀後半から12世紀前半の越州窯青磁である（写真6、7）。図7-1～9の白磁はすべて10世紀後半から11世紀中頃のものである（写真8～11）。



No.	出土ポイント	種類	器形	年代
1	23	白磁	鎬連弁文鉢(口縁部)	10世紀後半～11世紀中頃
2	17	白磁	櫛搔文碗(口縁部)	10世紀後半～11世紀中頃
3	32	白磁	碗(口縁部)	10世紀後半～11世紀中頃
4	27	白磁	碗(口縁部)	10世紀後半～11世紀中頃
5	31	白磁	鉢(口縁部)	10世紀後半～11世紀中頃
6	21	白磁	碗(底部)	10世紀後半～11世紀中頃
7	20	白磁	碗(底部)	10世紀後半～11世紀中頃
8	6	白磁	碗(底部)	10世紀後半～11世紀中頃
9	8	白磁	碗(底部)	10世紀後半～11世紀中頃
10	3	越州窯青磁	碗(口縁部)	10世紀前半～10世紀中頃
11	12	越州窯青磁	連弁文碗(口縁部)	11世紀後半～12世紀前半

図 7 中国陶磁器



No.	出土ポイント	器形	色調	装飾	年代	No.	出土ポイント	器形	色調	装飾	年代
1	35	ビーカー	無色	無装飾	10~11世紀	10	35	首部片	無色	ラスター装飾	10~11世紀
2	37	小ビーカー	淡青緑	無装飾	10~11世紀	11	34	ビーカー	無色	型装飾	10~11世紀
3	5	小瓶	淡青緑	器具装飾	10~11世紀	12	19	胴部片	無色	型装飾	10~11世紀
4	5	瓶	淡青緑	つまみ装飾	9~10世紀	13	35	胴部片	淡緑	型装飾	10~11世紀
5	35	ビーカー	淡青緑	ピンサー装飾	9~10世紀	14	35	胴部片	無色	型装飾	10~11世紀
6	35	小ビーカー	無色	スタンプ装飾	10~11世紀	15	35	底部片	無色	型装飾	10~11世紀
7	1	ビーカー	無色	カット装飾	10~11世紀	16	15	底部片	無色	型装飾	10~11世紀
8	37	ビーカー	無色	紐装飾	10~11世紀	17	18	底部片	無色	型装飾	10~11世紀
9	35	胴部片	無色	ラスター装飾	10~11世紀	18	30	底部片	淡緑	型装飾	10~11世紀

図8 ガラス器

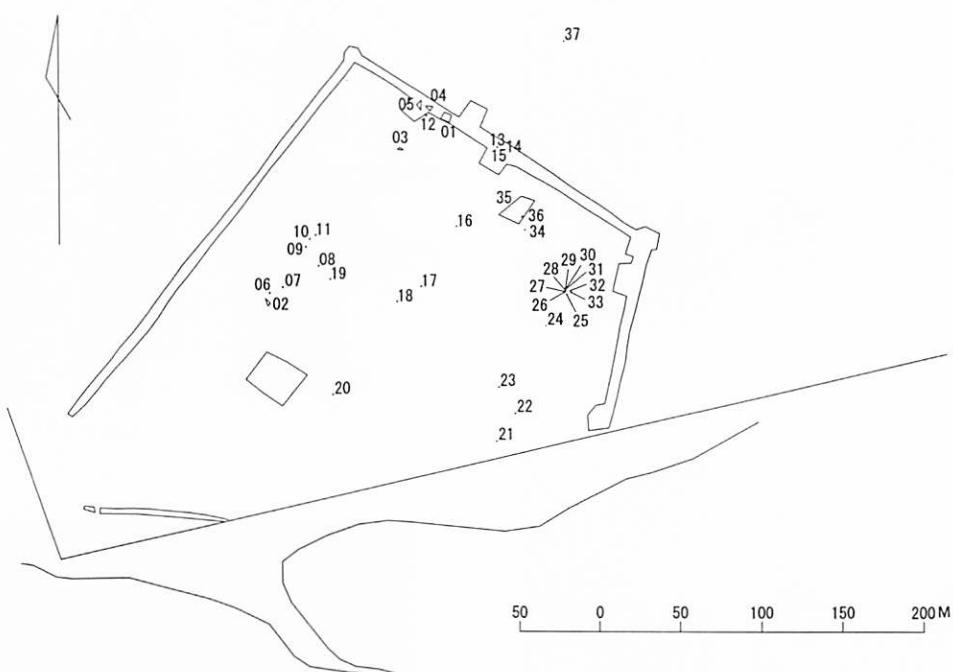


図9 表面採集ポイント図 (2003年1月作成)



写真5 陶片（釉薬はほとんどはがれてしまっている）

ガラスは10世紀から11世紀のものが中心である。今回の表面採集では、スタンプ装飾、カット装飾、ラスター彩装飾、型装飾などの装飾ガラスも発見され(図8-1～3、6～18、写真12)、10世紀から11世紀のものが中心であるが、ピンサー装飾など9世紀に遡る可能性があるガラス器片(図8-4、5、写真12の下列左端)の存在も確認された¹⁸⁾。

この港が機能した年代は、現在、筆者が発掘調査を継続中のシナイ半島南西部の港市ラーヤ遺跡およびかつて調査したバーディウ遺跡(Kawatoko 1993a: 186-202, 1993b: 203-224)と同じ年代である。これらの遺跡の調査を継続し、比較検討することによって、紅海北部の初期イスラーム時代の様相が明らかにされることと考えている。発掘の成果が大いに期待されるところである。

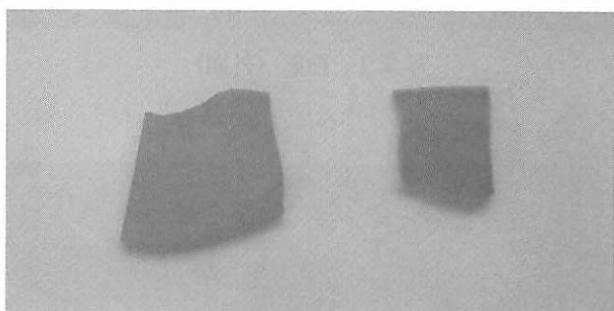


写真6 越州窯青磁（外面）

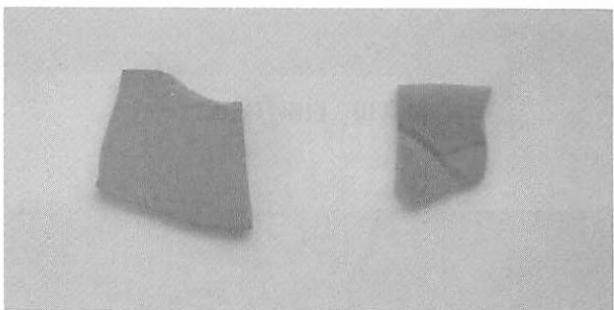


写真7 越州窯青磁（内面）

岩壁碑文調査

アラビア半島の岩壁碑文群に関する研究は19世紀に始められたが、主要対象は古代南アラビア諸語、ベドゥイン文字を含む古代北アラビア諸文字や古代南アラビア文字¹⁹⁾、ナバテア文字などによる古代碑文であった(写真

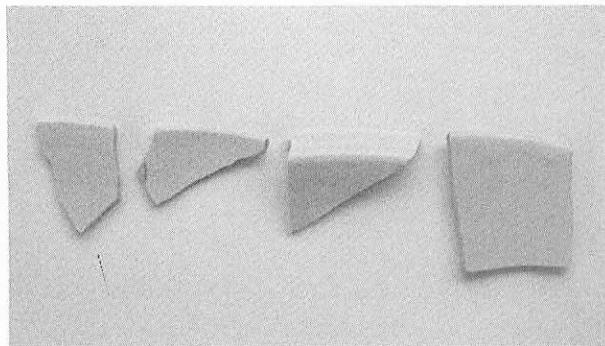


写真8 白磁（内面）

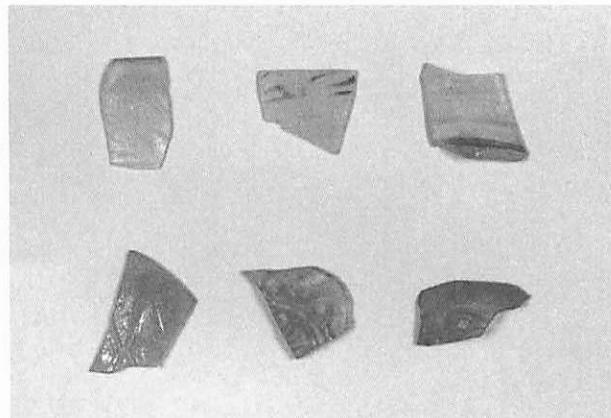


写真12 ガラス器

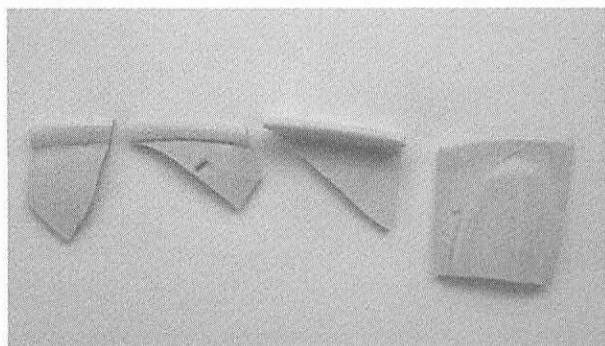


写真9 白磁（外側）

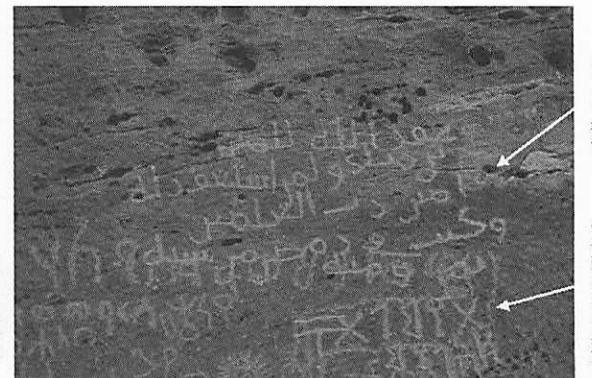


写真13 クーファ書体アラビア文字（川床担当）と
古代文字（徳永担当）

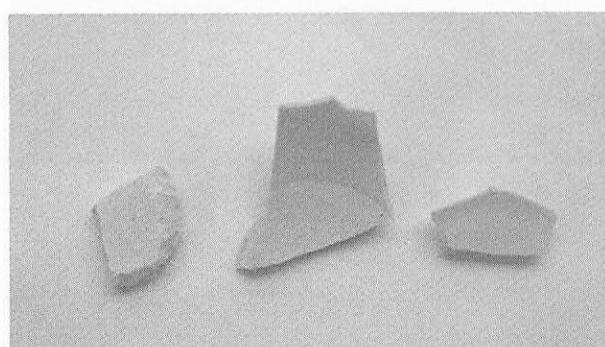


写真10 白磁（内面）

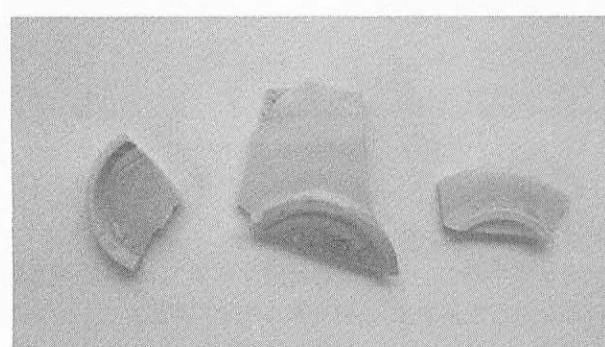


写真11 白磁（外側）

13)。イスラーム時代のアラビア語碑文が対象となったのは、ジョサン Jussen とサヴィニヤック Savignac たちの調査²⁰⁾においてである。しかし、調査の主要対象はやはり古代の碑文で、アラビア語岩壁碑文は付隨的に記録されたに過ぎなかった。1951-52年に実施された St. J. フィルビー (Philby)、G. リックマンス、J. リックマンス (Ryckmans)、P. リッペンス (Lippens) 調査隊も同様であったが、A. グローマン (Grohmann) が同調査隊の写真資料を用いて 297 点のアラビア語岩壁碑文を収める碑文集 (Grohmann 1962) を刊行した。その結果、これが最初のアラビア語岩壁碑文集²¹⁾となった。

1970 年代になると、サウディ・アラビア王国教育省考古・博物館局が王国内の遺跡分布調査の一環として碑文調査を実施した。1977 年に創刊された考古学雑誌 *Atlatl* には、創刊号から多数のアラビア語碑文が掲載されている。そして、このようなサウディ・アラビア考古学草創期に学生時代を送ったサード・アッラーシド博士 Prof. Dr. Sa 'd A. al-Rāshid たち (Sa 'd A. al-Rāshid 1992, 1995, 2000; Mohammed A. R. 1999) が 1980 年代以降、目覚しい活躍をすることとなった。

筆者は2000年夏に実施した第18次ラーヤ・トゥール地域の考古学的調査の際にシナイ半島南西部のナークース山Jabal Nāqūsでエジプト最大の岩壁碑文群を発見した。登録したアラビア語碑文940点を含む1663点の研究を進める過程で、これらの碑文が、実際に人が移動した記録であり、生きた巡礼・交易ルートを示す証拠であることが明らかとなった。「海のネットワーク」と有機的に関連する「陸のネットワーク」の実態を岩壁碑文が明らかにするであろうと考えたのである。また、岩壁碑文研究がアラビア文字書体の研究に欠かすことのできない資料であること、ニスバの収集と研究によって地名、部族研究の資料となることが明らかとなった。

すでに、刊行された碑文集、報告書等によって、サウディ・アラビアが岩壁碑文の宝庫であることは周知の事実である。そこで、2001年1月に考古・博物館庁の許可を得て、サウディ・アラビア王国の紅海沿岸部を中心に諸遺跡を訪問した。その結果を踏まえて、最初の調査の焦点をジャール～ヤンブウ～マディーナ地域(図10)とナジュラーン～ビィル・ヒマー～ヤダマ地域(図11)に絞った。両地域が巡礼と交易にとって重要な地域だからである。

2002年1月から3月、2003年1月から2月に上記2地域を調査し、マディーナ地域で511点、ナジュラーン地方で90点のアラビア語岩壁碑文を登録した。また、古代南アラビア語碑文とサムード碑文に関しては、マディーナ地域で80点、ナジュラーン地方で約6000点が登録された。これらの中には、フィルビー、リックマンス、リッペンス調査隊、サウディ・アラビアの調査隊などが既に登録したものも含まれるが、新たに登録されたものが多数ある。特にアラビア語碑文に関して言えば、極めて熟練した筆致で刻まれた良質の碑文が多数発見された。ここに、アラビア語岩壁碑文調査²²⁾の概要を報告する。

ジャール～ヤンブウ～マディーナ地域は、マディーナに

隣接するフライシュal-Furaysh地区(290点、表1、写真14)、紅海岸近くのバドゥル²³⁾地区(83点、表2)、そしてヤンブウ・アンナフル Yanbu' al-Nakhlとムサッラス al-Muthallath地区(138点、表3)に分けて調査した。また、南西部のナジュラーン地方のビィル・ヒマー～ヤダマ地域(90点、表4)を調査し、合計601点のアラビア語岩壁碑文を登録した。詳細は表1～4を参照されたい。

さて、2003年1月までに登録した601点で明らかとなつた重要な所見を列挙すると、1) 年号付の碑文が14点あつたこと、2) 女性が刻んだ碑文が存在したこと、3) サーリフ伝説に関する碑文があつたこと、4) 人の移動を示す碑文があつたこと、5) 古代南アラビア文字やベドウィン文字とクーファ書体アラビア文字が混在すること、6) アラビア数字がヒジュラ暦600年代に使われていたこと、7) ニスバの付いた人名が複数発見されたこと、8) 場所によって使用される語句に相違があること、などが指摘できる。これらは、いずれも資料の更なる蓄積と今後の詳細な研究を必要とするが、以下に現時点での理解を述べることとする。

1) 年代付の碑文はジャール～ヤンブウ～マディーナ地域で511碑文中7碑文、ビィル・ヒマー～ヤダマ地域で90碑文中7碑文であった。前者はヒジュラ暦23年、100年(写真15)、140年、170年、185年、1011年、1011年で、後者はヒジュラ暦27年、108年(写真16)、130年、173年、191年、193年、649年である。

現在までに、刊行された碑文集の主なものを見ると、年号の刻まれた碑文はマッカでは63碑文中6碑文、ルワーワRuwāwaでは55碑文中9碑文、ズバイダ路Darb Zubaydaでは70碑文中5碑文、イエメン路では302碑文中0碑文、フィルビーほか調査隊では305碑文中3碑文、ジャウフal-Jawf地方では47碑文中6碑文、ハーイルHa'il地方では190碑文中2碑文、その他合計1058碑文中



図10 アルジャール、ヤンブウ～アルマディーナ地域図

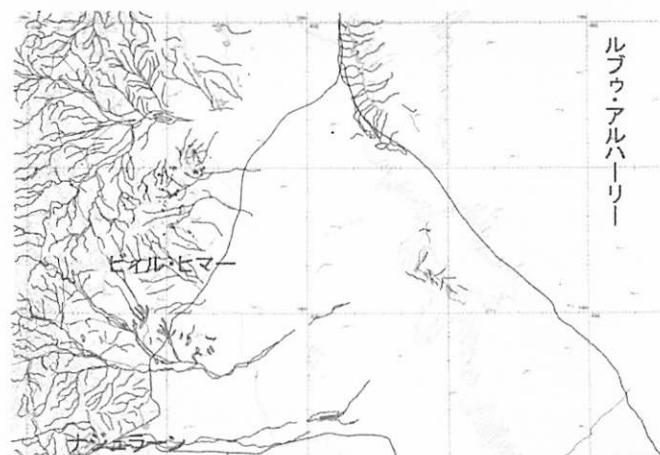


図11 ナジュラーン地域図



写真14 フライシュ地域



写真15 A.H. 100年の岩壁碑文 (FRSh-005d)

1- اللهم عافي (سليم) بن
 2- (بن ())
 3- لصدق في الدنيا والآخرة
 4- خرة ويوبيوم يموت ويبيو
 5- م ببعث حيا وعافية
 6- في بيته وفي جسده
 7- ه وفي أمره وإغفار
 8- له ذنبه ما تقدم منه و
 9- ما تأخر أمن رب آمن
 10- لعلمين (العالمين) رحم الله
 11- من قال أمن وكتب
 12- في سنة
 13- منة



写真16 A.H. 108年の碑文 (Hannaq al-Sammā)

37 碑文であった²⁴⁾。これらの年代は、ヒジュラ暦49年以前が2碑文、50年から99年が10碑文、100年から149年が10碑文、150年から199年が9碑文、200年から249年が4碑文、500年代と600年代が各1碑文であった。

以上の年代を見ると、アラビア語による岩壁碑文はヒジュラ暦1世紀には盛んになり、2世紀に最盛期に達したことがわかる。これはアッラーの御言葉であるアラビア語をより美しく表記しようとする書道の発展とも関係していたものと考えられる。同時に、アラビア文字の書体の変遷

表1 フライシュ地区の碑文数と北緯・東経

地点番号	調査日	碑文番号	北緯	東経	碑文数	碑文サイト名
23	020120	RGhB 001-003	24.12.985	39.13.197	3	al-Raghāyb
24	020120	RGhB 004-017	24.13.026	39.13.183	14	al-Raghāyb
25	020120	RGhB 018	24.12.892	39.13.084	4	al-Raghāyb
26	020120	RGhB 019	24.12.986	39.13.224	8	al-Raghāyb
27	020120	RGhB 020	24.12.911	39.13.281	2	al-Raghāyb
28	020120	RGhB 021	24.13.059	39.13.348	3	al-Raghāyb
30	020121	QL 001	24.12.352	39.12.508	3	Wādi 'Uwayqil
31	020121	HJJR 001	24.13.822	39.12.288	16	Muhajjar
32	020121	HJJR 001	24.13.778	39.12.359	2	Muhajjar
33	020121	ShJW 001	24.13.964	39.10.298	2	Shajwa
34	020121	ShJW 002	24.13.960	39.10.143	7	Shajwa
35	020121	ShJW 003	24.13.889	39.10.022	9	Shajwa
36	020121	ShJW 004	24.14.067	39.09.685	11	Shajwa
37	020121	ShJW 005	24.13.936	39.10.177	7	Shajwa
38	020121	HZR 001	24.13.566	39.10.340	34	Hazrā
40	020122	FRSh 001	24.12.198	39.15.084	27	al-Furaysh
41	020122	FRSh 002	24.12.273	39.14.825	5	al-Furaysh
42	020122	FRSh 003-005	24.12.471	39.13.791	73	al-Furaysh
44	020123	SDR 001	24.12.328	39.13.256	6	Sidāra
45	020123	QL 002	24.12.115	39.12.355	5	Wādi 'Uwayqil
47	020123	HZR 002	24.11.994	39.10.030	21	Hazrā
48	020123	HZR 003	24.11.995	39.10.032	13	Hazrā
49	020124	SDR 002	24.08.557	39.13.296	8	Sidāra
55	020124	SDR 003	24.11.528	39.13.403	1	Sidāra
56	020124	SDR 004	24.12.322	39.10.364	6	Sidāra
		合計			290	

表2 バドウル地区の碑文数と北緯・東経

地点番号	調査日	碑文番号	北緯	東経	碑文数	碑文サイト名
57	020126	KhYF 001	23.58.570	38.55.943	3	al-Khayf
58	020126	KhYF 002	23.58.767	38.56.068	1	al-Khayf
59	020126	KhYF 003	23.58.376	38.56.237	31	al-Khayf
60	020126	KhYF 004	23.58.378	38.56.277	14	al-Khayf
63	020127	HSN 001	23.50.255	38.53.012	2	al-Husayniya
64	020127	WST 001	23.51.371	38.56.084	4	al-Wāsiṭa
65	020127	WST 002-3	23.51.452	38.56.030	4	al-Wāsiṭa
67	020128	Bi'r Sa'īd	23.55.446	38.40.259	13	Bi'r Sa'īd
76	020129	NQ 001	24.14.072	38.58.602	5	'Unayq
77	020129	NQ 002	24.13.994	38.58.594	3	'Unayq
78	020129	NQ 003	24.13.992	38.58.618	3	'Unayq
		合計			83	

を論じるとき、岩壁碑文を無視することはできない。

さて、長い間、イスラーム時代最古の年代を持つ碑文として、ヒジュラ暦31年と刻まれたアスワーン墓碑があげられてきた(El-Hawary 1939: 321-33)。われわれは2002年2月から3月の碑文調査の際に、王国南西部ナジュラーン地方のワーディー・フシャイバ Wādi Khushayba でヒジュラ暦27年ジマーダー月(648年2月または3月)にヤズィード・ビン・アブド・アッラー・アッサルーリー Yazid bin 'Abd al-Lāh al-Salūlī が刻んだアッラーへの告白の一種イクラール iqqrār を記した碑文を発見した²⁵⁾(写真17、18)。

その後、2003年1月、数年前の考古・博物館庁の調査で発見され、未公表であったヒジュラ暦24年に刻まれた碑文

表3 ヤンブウ地区の碑文数と北緯・東経

地点番号	調査日	碑文番号	北緯	東経	碑文数	碑文サイト名
79	020130	MThLTh 001	24.50.354	38.24.891	5	Muthallath
80	020130	MThLTh 001	24.50.295	38.24.873	1	Muthallath
81	020130	MThLTh 001	24.50.300	38.24.842	1	Muthallath
82	020130	MThLTh 001	24.50.289	38.24.838	3	Muthallath
83	020130	MThLTh 001	24.50.286	38.24.811	7	Muthallath
84	020130	MThLTh 002	24.50.260	38.24.800	6	Muthallath
85	020130	MThLTh 002	24.50.256	38.24.777	1	Muthallath
86	020130	MThLTh 003	24.50.229	38.24.719	7	Muthallath
87	020130	MThLTh 004	24.50.220	38.24.685	1	Muthallath
90	020130	MThLTh 005	24.50.250	38.24.582	22	Muthallath
91	020130	MThLTh 006	24.50.234	38.24.557	5	Muthallath
92	020130	MThLTh 006	24.50.187	38.24.531	10	Muthallath
94	020131	MThLTh 007	24.50.246	38.24.309	2	Muthallath
96	020131	MThLTh 007	24.50.151	38.24.277	5	Muthallath
97	020131	MThLTh 007	24.50.106	38.24.206	2	Muthallath
98	020131	MThLTh 008	24.50.141	38.23.881	2	Muthallath
99	020131	MThLTh 009	24.49.549	38.23.247	9	Muthallath
100	020131	ShRJ 001	24.23.596	38.40.917	4	Sharja
101	020131	ShRJ 002	24.23.682	38.41.204	8	Sharja
105	020131	ShRJ 003	24.23.595	38.40.632	1	Sharja
107	020202	ShRJ 004	24.25.342	38.46.607	18	Sharja
108	020202	ShRJ 005	24.23.424	38.45.957	7	Sharja
111	020202	ShRJ 006	24.22.431	38.45.448	11	Sharja
		合計			138	

表4 ピイル・ヒマー地区の碑文数と北緯・東経

地点番号	碑文サイト名	北緯	東経	碑文数
117	Bi'r Ḥimā	18.14.962 N	44.27.107 E	6
118	Bi'r Ḥimā	18.15.022 N	44.27.077 E	6
121	'Ān al-Jamal	18.17.816 N	44.30.880 E	7
125	'Ān Dhabāḥ	18.18.105 N	44.31.087 E	1
127	'Ān Dhabāḥ	18.18.035 N	44.31.150 E	1
142	Abiyār (Ābār) Ḥarima	18.25.649 N	44.29.145 E	1
143	Abiyār (Ābār) Ḥarima	18.25.613 N	44.29.192 E	1
159	Shis'ā al-Bā'iya	18.24.138 N	44.30.800 E	3
160	Shis'ā al-Bā'iya	18.24.137 N	44.30.740 E	1
167	Jabal Qāra	18.22.585 N	44.29.309 E	3
170	Jabal Qāra	18.24.413 N	44.30.859 E	1
220	Jabal 'Ān al-Na'āma	18.37.068 N	44.22.736 E	1
223	Zamzam	18.36.399 N	44.22.846 E	1
225	Zamzam	18.35.640 N	44.22.908 E	1
226	Zamzam	18.35.057 N	44.22.587 E	1
227	Zamzam	18.35.075 N	44.22.539 E	1
228	Zamzam	18.35.041 N	44.22.522 E	1
234	al-Quṣṣar	18.25.467 N	44.32.376 E	2
264	Farā'id 'Atayfa	18.30.317 N	44.31.378 E	1
267	Farā'id 'Atayfa	18.30.116 N	44.31.897 E	1
271	A Mountain near 'Ān Dhabāḥ	18.18.590 N	44.31.171 E	1
291	A Hill with Thamudic/Kufic	18.29.899 N	44.31.378 E	5
293	A Hill with Thamudic/Kufic	18.29.897 N	44.31.323 E	3
298	Jabal al-Kawkab/Għal al-Jūl	18.32.289 N	44.39.463 E	1
300	Khushayba	18.29.898 N	44.37.257 E	13
301	Entrance of Khushayba	18.29.360 N	44.37.520 E	1
305	Wādi ḥāba	18.29.302 N	44.36.440 E	3
310	Wādi ḥāba	18.29.720 N	44.37.346 E	1
314	Wādi ḥāba	18.29.260 N	44.36.087 E	1
364	Farda Umm Khurq	18.14.247 N	44.34.676 E	3
367	Wādi Thu'ar/Qalta	18.26.836 N	44.28.846 E	2
376	Wādi Huqūn	18.33.448 N	44.36.019 E	6
379	Għaraziyyat	18.32.707 N	44.36.569 E	1
385	Hannaq al-Sammā	18.22.372 N	44.33.396 E	3
386	Hannaq al-Sammā	18.22.385 N	44.33.322 E	4
388	A Hill near 'Ān Dhabāḥ	18.17.623 N	44.31.616 E	1
	合計			90

تَحْمِلُ اللَّهُ عَلَى يَزِيدَ بْنِ عَبْدِ اللَّهِ السَّلْوَلِيِّ
 كَتَبَ فِي جَمَادِي مِنْ سَنَةِ سَبْعٍ وَّعَشْرِينَ



写真17 ワーディー・フシャイバの碑文（上）とその転写（下）



أَنْجَلَ اللَّهُ عَلَى يَزِيدَ بْنِ عَبْدِ اللَّهِ السَّلْوَلِيِّ

写真18 ヤズィードのもうひとつの碑文（誤記が多い）

がジャナードゥリーヤの同所展示室で公表された。その碑文には、「私、ズハイルがウマルが死んだ時、24年に書いた」と刻まれている²⁶⁾（写真19）。

ここで、不確かなものを挙げると、ムサッラスで発見した MThLTh-009j には、「サルマ Salma²⁷⁾が 23 (年) に書いた」と刻まれている（写真20）。この 23 が年を示してい



写真 19 公表された最古のアラビア語碑文 (写真転載)

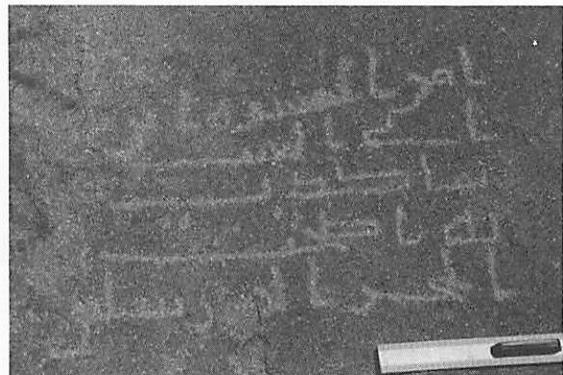


写真 22 ヒジュルの民に言及した碑文 (HZR-002d)



写真 20 MThLTh-009j (23年の碑文か?)

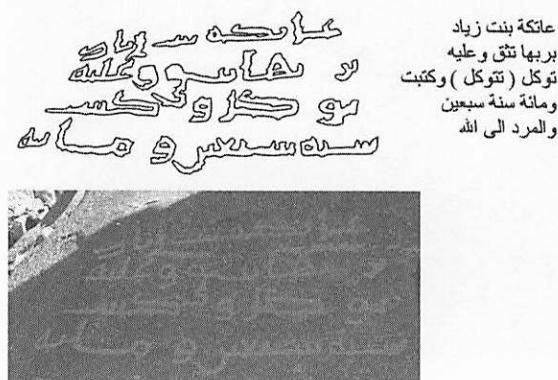


写真 21 A.H. 170年の岩壁碑文 (FRSh-004bl)

るとすれば、これがイスラーム時代最古のアラビア語碑文になる。

2) フライシュ地区の碑文が豊富な谷には、女性が刻者である碑文がひとつ確認された。FRSh-001 b 1は、「ズィヤードの娘アーティカ 'Ātika bint Ziyādは主を信じ、委ねる。これを 170 年に書いた」というイクラールである(写真 21)。初期イスラーム時代においては、女性の社会的地位は必ずしも低くはなかったが、岩壁碑文を見る限りにおいては、女性の刻者名は極めて稀である。一連の調査ではこの 1 碑文のみであった。また、すでに刊行されている碑文集にもほとんど収録されていない。



写真 23 アブー・アルムガイラの碑文 (RGhB-001)

3) フライシュ地区の碑文 (HZR-003 e と SDR-003) にはコーランに出てくるヒジュルの民 *ashāb al-Hijr* に関する記述²⁸⁾(第 15 章 80 節) が見られる。若干の語句の相違はあるが、初期のコーランが大型家畜の骨のみならず岩壁に刻むという方法で記録にとどめられたかもしれないという可能性が指摘できる(写真 22)。

4) フライシュ地区のマディーナ寄りのラガーイブ²⁹⁾ *al-Raghāyb* で、アブー・アルムガイラ *Abū al-Mughayra bin Muḥammad bin Abī al-Mughayra* が刻んだイクラールを発見した(写真 23)。この人物を調べていたところ、サアド博士が調査し、登録したラワーワ第 7 号碑文 (*Sa 'd al-Rāshid 1992: 24-25*) (写真 24) と同一人物であることがわかった。この事実は、アブー・アルムガイラが、ある時ルワーワとラガーイブという約 40 km 離れた地点を移動したことを示している。なお、2つの文字は筆跡が極めて類似しており、同一人物のものに間違いないものと思われる。

5) 岩壁碑文の後発グループであるアラビア語碑文は、すでに古代南アラビア文字、ベドウィン文字が書かれてい

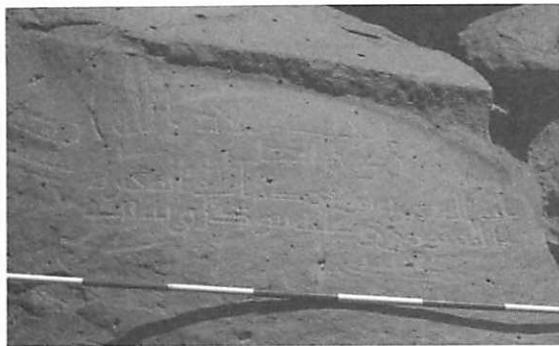


写真24 ルワーワのアブー・アルムガイラ碑文
(2003年1月26日撮影)



写真26 アラビア数字が書かれた碑文



写真25 ベドゥイン文字とともに
(191年の碑文 Gharazīyāt)

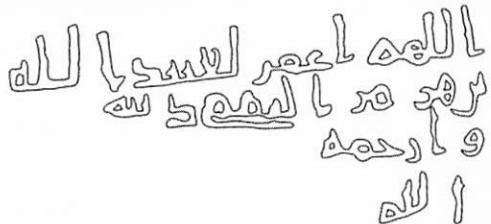


写真27 サキーフ族のニスバが書かれた碑文

る岩壁の隙間、あるいは新しい岩壁に刻まれた（写真25）。ジャール～ヤンブ～マディーナ地域では511アラビア語碑文に対して、ベドゥイン文字碑文は80碑文に過ぎなかった。これに対し、ビル・ヒマー地域では6000以上の古代南アラビア文字、ベドゥイン文字碑文に対し、アラビア語碑文は90碑文のみであった。岩肌を埋め尽くすように刻まれた碑文の隙間にアラビア語碑文が刻まれたのである。このような理解で登録を続けたところ、わずかではあるが、アラビア語岩壁碑文の上からベドゥイン文字碑文が刻まれている場合があることが確認された。すでに、アラビア文字とベドゥイン文字で併記された人名を含む碑文の存在が確認されているという情報³⁰⁾もあるので、2つの文字が同時期に使用されていたことは疑う余地もない。現在、古代南アラビア文字との切り合い関係を調べているが、古代南アラビア文字とベドゥイン文字が同時期に使用されていたことは間違いないので、この3つの文字は初期イスラーム時代においては、同時に使われていた可能性が高い。このような仮説を下に考察すると、プレ・イスラーム時代からイスラーム時代まで、常に重要な交易路であった同地域で、アラビア語碑文が極端に少ない理由がわかるのである。このことは、ある地域のイスラーム化とアラビア語化は別々

に考えるべきであるということを示唆しているのである。

6) アラビア数字の発明は早い時期にあった。しかし、読み書きに便利で計算にも便利なアラビア数字の普及は迅速に達成されたわけではなかった。理由は改竄が容易であるためであろうと考えられる。

年号に関しても、アラビア数字が使われる例は遅く、ヒジュラ暦900年代に入って一般的になった。コインでも、オスマン帝国時代のものにアラビア数字の使用が一般的に認められる。

ワーディー・フシャイバで発見されたスライマーン・イブン・ジャアファル・アッサアディー Sulaymān ibn Ja'far al-Sa'dī が刻んだ祈願文には、アラビア数字で649年(西暦1251/52年)と刻まれている(写真26)。アラビア数字の使用は私的なものが公的なものに先行すると考えられるので、今後私的古文書と岩壁碑文の研究が重要な意味を持つ

ことになるであろう。

7) アラブ諸部族の名前は、本人の名の後に父親の名を数代連ねるものであるが、最後に部族名、出身村・都市・地域・国名、あるいは職業名を付けて、より明確に個人を同定する場合がある。これらはニスバと呼ばれる。

今回の調査では、サルール族、サキーフ族(写真27)、ムザイナ族、サアラバ族とザミーウ家のニスバを持つ人名が発見された。特に、サキーフ族のニスバはフライシュ地区とビイル・ヒマー地域のアーン・ザバーフ‘Ān Dhabāhで発見されている。部族の歴史、テリトリー、移動などを研究するための資料となるであろう。また、プレ・イスラーム時代のものも含めた人名の蒐集は人名、部族名、地名研究に新しい光を当てるであろう。

8) 601碑文の文章、使用されている語句には地方差が顕著である。シナイ半島南西部のナークース山の岩壁碑文940碑文も含めて、判読できたものを検討して得られた結果を以下に記す(ただし、以下に挙げる数字は確定したものではない)。

- ghafara およびその派生語が使われている碑文はジャール～ヤンブゥ～マディーナ地域(以下では北と表記する)で99碑文、ビイル・ヒマー地域(以下では南と表記する)では28碑文であった。一方、ナークースでは73碑文であった。
- amina およびその派生語が使われている碑文は、北で71碑文、南で3碑文、ナークースで3碑文であった。
- 信仰告白は、北で54碑文、南で2碑文、ナークースで178碑文であった。
- anā で始まるものは、北で37碑文、南で0碑文、ナークースで0碑文であった。
- rahīma およびその派生語が使われている碑文は、北で3碑文、南で31碑文、ナークースで30碑文であった。
- wathiqa およびその派生語が使われている碑文は、北で28碑文、南で0碑文、ナークースで36碑文であった。
- allāhumma で始まる碑文は、北で23碑文、南で3碑文、ナークースで40碑文であった。
- as'al で始まる碑文は北で10碑文発見されたのみである。

このように、地域差は歴然としている。今後の詳細な研究は使用語句の相違の意味をより明確にすることになるであろう。

9) 人名の同定はまだ完了していない。名前だけで見るところ、FRSh-004 m の刻者イブラーヒーム Ibrāhīm bin ‘Abd al-Rahmān (al-‘Umarī) は、『マッカ史』によれば、マッカの法官 qādī であった³¹⁾。FRSh-003 g の刻者アブド・アッラフマーン‘Abd al-Rahmān bin Ḥassān は104年に死んだ³²⁾。また、FRSh-005 a の刻者アブド・アッラー・ビン・ Aws ‘Abd al-Lāh bin Aws の名に関する記述も見られる³³⁾。ただし、完全に同定するには、より豊富な時間が必要である。

今回の調査で特筆すべきことは、ヒジュラ暦100年代を中心に年代の刻まれた碑文が高比率で発見されたことである。また、女性名で書かれた碑文、出自部族を示すニスバを含む碑文などが発見され、今後のルート研究、部族研究、地名研究、人名研究、書体研究などに極めて重要な史料を付加することとなった。

これはサウディ・アラビア考古学雑誌 *Atlas* 第17号に提出された文章を日本語に翻訳し、若干の手を加えたものである。

註

- 1) 調査の母体は、サウディ・アラビア研究会である。そして、この研究会は日本西アジア考古学会サウディ・アラビア・プロジェクト、日本ナイル・エチオピア学会サウディ・アラビア小委員会、日本沙漠学会沙漠誌分科会によって構成されている。なお、2001年の訪問(調査)は中近東文化センター研究費とトヨタ財团助成金(徳永里砂)によるものである。2002年は徳永氏のほかに、松本健氏(国士館大学イラク古代文化研究所教授)と辻村純代氏(同研究所共同研究員)、2003年は高橋岳志氏(株式会社フジテクノ調査課長)と池内覚氏(株式会社フジテクノ主任技師)が参加した。
- 2) Al-Hamdānī 1989(校訂) *Kitāb Sifat Jazīrat al-‘Arab*, Baghdād, p. 84; Ibn al-Faqīh 1967(校訂)/1302 *Mukhtasar Kitāb al-Buldān*, M. J. de Geoje (ed.), Leiden, p. 78; Abū ‘Ubayd al-Bakrī al-Andalusī 1945(校訂) *Mu’jam mā ista’ajam*, al-Qāhira, Vol. 1, p. 7; ‘Abd al-Mun‘im al-Himyārī, *Kitāb al-Raud al-Mi’tār fī Khabar al-Aqṭār*, al-Qāhira, n.d., pp. 163-64; U. Minorsky (tr.) 1970 *Hudūd al-Ālam*, London, Luzac, p. 148.
- 3) Al-İştakhrī 1967(校訂) *Kitāb Masālik al-Mamālik*, M. J. de Geoje (ed.), Leiden, E. J. Brill, p. 19. (初版1870年) これに対して、ヤークートは1昼夜であると記している。Yāqūt al-Hamawī n. d. *Kitāb Mu’jam al-Buldān*, Vol. 2, Bayrūt, p. 92. また、フルダーズビフは2日行程としている。Ibn Khurdādhbih 1967(校訂) *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, M. J. de Geoje (ed.), Leiden, E. J. Brill, p. 191. (初版1885/1302年)
- 4) *ibid*, p. 19.
- 5) 現在のドゥバーDubā'である。
- 6) Ibn Hawqal 1938(校訂) *Kitāb Sūrat al-Ard*, J. H. Kramer (ed.) Leiden, pp. 27-47.
- 7) Al-İştakhrī, *op. cit.*, p. 27; Yāqūt, *op. cit.*, p. 92. ヤークートはジャールとアイラの間は10日行程としている。
- 8) 後に述べるカラーフQarāf島であると考えられている。Encyclopaedia of Islam, Al-Djārの項を参照のこと。
- 9) 現在のスーダンであるとスーダンの歴史家の多くは考えている。
- 10) Ibn Sa’d 1917(校訂) *Kitāb al-Tabaqāt al-Kabīr*, Leiden, p. 139; al-Tabarī 1968(校訂) *Tārikh al-Tabarī*, Vol. 2, al-Qāhira, p. 654.
- 11) Al-Ya’qūbī n. d. *Tārikh al-Ya’qūbī*, Vol. 2, Bayrūt, p. 154; al-Balādhīrī n. d. *Kitāb Futūh al-Buldān*, n. p., p. 253.
- 12) Al-Muqaddasī 1967(校訂) *Ahsan al-Taqāṣīm fī Ma’rifat al-Aqālīm*, M. J. de Geoje (ed.) Leiden, E. J. Brill, p. 83 & 97(初版1877年).
- 13) ‘Arrām bin al-Asbagh al-Sulamī 1973(校訂) *Kitāb Asmā’ Jibāl Tihāma wa Sukkānīhā, Nawādir al-Makhtūtāt*, Vol. 5, al-Qāhira, p. 398. この記事は後世の地理学者等が引用している。al-Bakrī al-Andalusī, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 355-56; Yāqūt, *op. cit.*, pp. 92-93.
- 14) 1 mil=4000 dhirā'で、約2.3km。
- 15) Al-Muqaddasī, *op. cit.*, p. 83.
- 16) 教育省考古・博物館局(現在は考古・博物館庁)は、王国内の遺

- 跡分布調査を実施するに際して、王国を紅海岸を北から北西部、西部、南西部、中央部を北から北部、中央部、湾岸部を東部、という6遺跡区に分割した。
- 17) 5点の北緯と東経(簡易GPSで測定したデータである)は、①北緯23度37.926分、東経38度32.021分、②北緯23度38.085分、東経38度31.968分、③北緯23度38.199分、東経38度32.075分、④北緯23度38.269分、東経38度32.513分、⑤北緯23度38.005分、東経38度32.584分である。また、①②間の距離は360.940m、②③間の距離は269.991m、③④間の距離は755.489m、④⑤間の距離は503.879m、⑤①間の距離は949.221mである。
 - 18) 中国陶磁器の観察と実測図は青山学院大学教授の手塚直樹氏、ガラス器の観察と実測図は中近東文化センター研究員の真道洋子氏が担当した。ここに記し、感謝の意を表するものである。
 - 19) 一般的にサムード文字 Thamūdic と呼ばれているものである。ここではアンサーリー博士 Prof. Dr. 'Abd al-Rahmān al-Anṣārī の提唱を採用して、ペドウィン文字とする。
 - 20) この調査は総合的考古学調査で、碑文も調査対象であった。登録されたアラビア語碑文は18点に過ぎない (Jaussen and Savignac 1909-14)。
 - 21) 建造物などに刻まれた碑文の集成は1900年代初期から刊行されている。
 - 22) 古代南アラビア文字及びペドウィン文字碑文に関しては、調査に参加した徳永里砂氏がまとめている。
 - 23) 預言者ムハンマド軍がマッカ軍を破ったバドゥルの戦いがあつたところ。
 - 24) Grohmann 1962; Sa'd A. al-Rāshid 1992, 1995, 2000; Mohammed A. R. 1999; Nāṣir bin 'Alī wa 'Ādil Muḥammad 1980 Nuqūsh Islāmīya Mubakkira fī Wādī al-'Asīla bi Makka al-Mukarrama, 'Ālam al-Makhtūtāt wa al-Nawādir, pp. 12-65などを参照のこと。
 - 25) 写真とトレースには「...アッサルーリーが27年ジュマーダ一月に書いた」という部分のみ掲載したが、その前には、「アッラーよ、ヤズィード・ビン・アブド・アッラー...に哀れみを示したまえ... tarāḥḥam al-Lāh 'ala Yazid bin 'Abd al-Lāh」と書かれている。なお、この碑文の上方の岩には同一人物の碑文が刻まれているが、アッラーとアッラーフンマの単語を誤記している(写真18)。
 - 26) 毎年1月頃にジャナードゥリーヤで開催される王国伝統文化祭の考古・博物館展示室に写真が展示され、配布されていたパンフレットに写真が掲載されている (A Selection of Islamic Inscriptions from the Kingdom of Saudi Arabia issued by the Deputy Ministry of Antiquities and Museums, Ministry of Education on the Occasion of the National Festival for Cultural Heritage in Janadria, 8-22 January 2003.)。
 - 27) サラマ Salama あるいはサリマ Salima とも読み得る。
 - 28) 預言者サーリフの言葉に耳を貸さなかったサムードの民(ヒジュルスなわちマダーイン・サーリフ Madā'in Ṣalih の住人)がアッラーの懲罰を得たという話である。サムードの民に関しては、第7、9、11、14、17、22、25、26、27、29、38、40、41、50、51、53、54、69、85、89、91章にも書かれている。
 - 29) ハイウェイ建設のために、破壊の危機に晒されている。
 - 30) 2003年1月22日、ナジュラーン地方博物館長のアブド・アルアズィーズ氏 Mr. 'Abd al-'Aziz al-'Umarī のご教示による。氏によれば、2003年の出版予定である同氏の著作『ナジュラーン』に

掲載されるとのことである。

- 31) Ibn al-'Abbās al-Fākihī al-Makkī 1998(校訂) *Akhbār Makka fī Qadīm al-Dahr wa Hadīthihi*, Makka al-Mukarrama, p. 332.
- 32) Ibn Hajar al-'Askalānī 1907(校訂)/1325 *Kitāb Tahdhīb al-Tahdhīb*, Haydirābād, article 329; Ibn Hajar al-'Askalānī 1975(校訂) *Taqrīb al-Tahdhīb*, al-Qāhira, article 912; Shams al-Dīn al-Takhawī 1979(校訂) *al-Taḥfa al-Laṭīfa fī Tārikh al-Madīna al-Sharīfa*, al-Qāhira, p. 480; Ibn Ḥazām al-Andalusī n. d. *Jamhara Ansāb al-'Arab*, al-Qāhira, p. 347.
- 33) Ibn Hajar al-'Askalānī, *Kitāb* (*op. cit.*), article 259; Ibn Hajar al-'Askalānī, *Taqrīb* (*op. cit.*), p. 402; Abū 'Abd al-Lāh 'Uthmān al-Dhahabī, n. d. *Mīzān al-I'tidāl fī Naqd al-Rijāl*, al-Qāhira, p. 107.

引用文献

- 'Abd al-Quddūs al-Anṣārī 1971 (July) *Riḥlatāni min Madīna Judda ilā Aṭlāl al-Jār. al-Manhal*.
- 'Alī Ḥāmid Ghabbān 1993 *al-Āthār al-Islāmīya fī Shamāl Gharb al-Mamlaka*, Madkhal 'Ām, al-Riyād.
- Burckhardt, J. L. 1829 *Travels in Arabia*. London, H. Colburn.
- El-Hawary, N. M. 1930 The Most Ancient Islamic Monument Known Dated A.H. 31 (A.D. 652) from the Time of the third Caliph 'Uthman. *The Journal of Royal Asiatic Society*.
- Grohmann, A. 1962 *Expédition Philby-Ryckmans-Lippens en Arabie, Textes épigraphiques, Arabic Inscriptions*. Leuven, Publication Universitaires.
- Hamad al-Jāsir 1981 *Fī Shamāl Gharb al-Jazīra*. Judda.
- Jaussen J. A. and Savignac, R. 1909-1914 *Mission archéologique en Arabie*, 4 Tomes. Paris, E. Leroux.
- Kawatoko, M. 1993a On the Tombstones Found at the Bādi' Site. *Kush* 16: 186-202.
- Kawatoko, M. 1993b Preliminary Survey of 'Aydhāb and Bādi' Sites. *Kush* 16: 203-224.
- Killick, A., et al. 1981 Saudi Arabian Archaeological Reconnaissance 1980. Preliminary Report on the Western Province Survey. *Atāl* 5: 51-53.
- Ministry of Communications 1999 *Transportation and Telecommunications in the Kingdom of Saudi Arabia during 100 Years*, Vol. 1. Riyadh.
- Mohammed A. R. al-Thenayian 1999 *An Archaeological Study of the Yemeni Highland Pilgrim Route between San'ā' and Makkah*. Riyadh.
- Sa'd A. al-Rāshid 1980 *Darb Zubayda*. Riyadh.
- Sa'd A. al-Rāshid 1992 *Kitābāt Islāmīya ghayr Manshūra min Rawāwa al-Madīnat al-Munawwara*. al-Riyād.
- Sa'd A. al-Rāshid. 1995 *Kitābāt Islāmīya min Makka al-Mukarrama*. al-Riyād.
- Sa'd A. al-Rāshid 2000 *Dirāsāt fī al-Āthār al-Islāmīya al-Mubakkira bi al-Madīna al-Munawwara*. al-Riyād.
- Scheffer, C. (tr.) 1881 *Sefer Nameh: Relation du Voyage de Nassiri Khosrau*. Paris.
- 織田武雄監修、中務哲郎訳 1986 『ブトレマイオス地理学』東海大学出版会。

川床睦夫
中近東文化センター
Mutsuo KAWATOKO
The Middle Eastern Culture Center in Japan